(2/2)

島根県津和野町の永明寺にある森鷗外の墓。三十三回忌に建てられた。周りは父や祖父ら親族の墓もある

故郷でのキリスト教徒迫害

殉教事件に沈黙を守る

1862年に石見国津和野藩の典医の家に生まれた森鷗外は、10歳で離れた故郷に生涯戻ることはなかった。その理由を知りたくて、島根県津和野町を訪ねた。

JR津和野駅の裏手を谷川に沿って200メートルほど登ると、乙女峠に着く。江戸時代を通じ信仰を守った隠れキリシタンが維新後、厳しく改宗を迫られた所だ。そこにはマリア聖堂が建てられ、殉教者の霊を慰めている。

周囲にはまだ雪が残り、厳冬期の水責めや、狭いおりに裸で閉じ込め外気にさらすなどの拷問が、いかに過酷だったか、たやすく想像できた。

「優しく多感な少年だった鷗外が、この出来事を知らないはずがありません。小説『キタ・セクスアリス』などで、幼少期の故郷を懐かしむ文章を記した鷗外が、生涯このことで沈黙を守ったのは、意識的に避けたためだと思います」

町文化財保護審議会会長の松島弘氏(81)は語る。さらに、取り調べ役人の一人に親戚がいたのも、鷗外に「身内の恥」という感覚を持たせ、それが故郷を避けた一つの理由になったのではないか、と推論する。

「津和野は本来、どの宗派にも優しい所なんです。あの時も薩長は『リーダー格は首を切れ』と主張したのに、津和野は『説諭改宗させる』と一番穏便であった」

だが新政府による神道の国教化政策を、津和野出身の国学者たちが中心となって担っていたため「大勢の信者を引き受けることになったんです。でも全員を説得することができず、現場が任務を強行してしまった」。

周りを山で囲まれた津和野では、学問を通した人材育成を重視。藩校の養老館は明治期、「哲学」という言葉を生んだ西周ら多くの逸材を輩出した。鷗外も7歳から約3年間ここで学んだ。

鷗外は遺言で「石見人」として「死セン」と書いている。「最期の時に鷗外が帰りたかった『石見』とは、養老館で希望に燃えて学んでいた日々ではないでしょうか」

乙女峠に近い永明寺にある鷗外の墓を参った。東京・三鷹にある禅林寺の墓と同じく、本名の「森林太郎墓」とのみ刻まれている。西洋に猛スピードで追い付こうとした明治という時代の中で、国家の進める近代化と自らの理想との落差に苦しんだ鷗外は、国家から与えられた肩書を捨て、個人に戻ったとき、故郷に帰ることができたのだ。(文・立花珠樹、写真・藤井保政)

森鷗外を巡る主な出来事

明治 1868年～

- 1862 石見国津和野藩(島根県津和野町)の典医の家に長男として生まれる。本名は森林太郎
- 68 改宗・棄教のため津和野藩がキリスト教徒受け入れ
- 69 藩校の養老館に入る
- 72 父と共に上京
- 73 キリシタン禁制の高札を撤去、信徒も釈放
- 81 東京大学医学部を卒業、陸軍軍医に
- 84 陸軍省から派遣されドイツ留学(～88年)
- 89 大日本帝国憲法発布
- 90 小説「舞姫」発表
- 94 日清戦争(～95年)
- 1904 日露戦争(～05年)
- 07 陸軍軍医総監・陸軍省医務局長に就任
- 1910 大逆事件
- 〃 小説「沈黙の塔」を発表

大正 1912～

- 16 予備役となる
- 22 60歳で死去

次回は6月25日に掲載します